

| | |
|--------------|---|
| Title | (要旨) ベルリン所蔵トカラ語B寺院経済文書の分析と年代について |
| Author(s) | 慶, 昭蓉; 萩原, 裕敏 |
| Citation | 内陸アジア言語の研究. 25 P.136-P.141 |
| Issue Date | 2010-10 |
| Text Version | publisher |
| URL | http://hdl.handle.net/11094/26141 |
| DOI | |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

(要旨) ベルリン所蔵トカラ語 B 寺院経済文書の分析と年代について

慶 昭蓉・荻原裕敏

現在、筆者らは、各国に所蔵されているトカラ語世俗文書の総合的研究を進めており、既に、ドイツ・フランス・ロシア所蔵の文書について調査を行った。トカラ語による世俗文書は各国に所蔵されているが、ベルリン・コレクションが、その大部分を占めている。ベルリンの国家図書館所蔵の文書は、*TochSprR(B)II* で、Nr. 433-489 として転写が出版されているだけでなく、Sieg (1950) による研究も公表されている。しかしながら、これまでに公表された資料は、全体の一部に過ぎず、同じ文書群に属すると考えられる数多くの文書 (THT2679-2950) は、研究対象とされないうままとなっていた。これらの文書は、その大きさ・形状の共通性、文書に残されている染みやカビの痕跡といった点を手がかりに、おおよその配列を確定することが可能である。その結果、この文書群は、いくつかのグループに分類できることが明らかになった。本論文では、そのほとんどを占めるグループ (main group と呼ぶ) の内部構成・年代を扱う。

本論文で main group とした文書は、紙の質や色・形状・紙背に見られる署名が共通しており、内容から、以下のように分類することができる。

タイプ 1: 穀物 (製品) 出破歴

1-a: 僧院内部用

1-b: 浄人・工匠などの外部者用

1-c: a と b の混合 (THT2705 のみ)

タイプ 2: 油, ギー (?) 出破歴

タイプ 3: 寺院経営関係

上記分類のタイプ1は、特定の穀物ではなく、それらからの加工品を扱っている。これらは、トカラ語Bでは、*klese*, *wākte*, *yikšye*などの語で表されているが、如何なる実体を指していたかは不明である。タイプ1-aには、施与もしくは納入された食糧の記載も時折見られるが、頻度は高くない(これらの施与もしくは納入についても、以下に述べる *Pañcwarike* と *Saṅkāstere* の監督下に置かれる)。記載の基本的な方法は、名前の不明な筆記者が、月の何日、どれだけの量を支出したかを記録し、毎日、若しくは、数日に一度、*Pañcwarike* と *Saṅkāstere* という職位にある二人の高位の僧侶に提示し、彼らの署名をもらうという方法である。これは、以下のような書式となっている。

Pañcwarike (某甲) *lyāka* [署名] *Saṅkāstere* (某乙) *śarsa* [署名]

Pañcwarike (某甲) は見た。[署名] *Saṅkāstere* (某乙) は知った。[署名]

この書式の「見た」「知った」は、漢文文書に見られる書式を想起させる。

タイプ2は、原料不明の植物油 (*miyokotauşşe şalywe*)・牛酥 (*kewye şalywe*) の管理に関わる文書であり、これらは食用・灯りなどの用途に用いられている。タイプ2の文書は、タイプ1のものと比較して、破損が激しく、油・酥の施与もしくは納入の記載が、これらの文書に含まれていたか否かについては判断できない。しかしながら、利用できる記載からは、タイプ1に見られるような僧院とそれ以外の人々の区別はされていなかったと思われる。記載の書式は、タイプ1と同様である。興味深いのは、度量衡として、これまでに知られていた「石 (*cāk*)」「斗 (*tau*)」「升 (*şāṅk*)」という漢語からの借用語以外に、*kalāşe* という単位が使用されている点である。この語は、今まで指摘されたことはないが、梵語 *kalāci-/kalācika-* ‘spoon’ の借用語であると解釈した。タイプ2に属する文書では、この単位は、中国の「合」、即ち「十分の一升」に相当していると考えられる。

トカラ語Bの *Pañcwarike* は、これまで知られているトカラ語B 世俗文書では、キジル発見のものにのみ見られる役職名であり、梵語 **pañca-vārika-*

に由来し、「五事を掌る者」、若しくは、当該の僧院が、五名の管理人を設置していたことを指していると推定される。文書からは、任期が比較的長い *Sankāstere* に対して、*Pañcwarike* は、数日おき（ほぼ 1~5 日おき）に交替していたように見受けられる。ここで管理されている食糧・油は、僧侶に提供される他、浄人 (*kapyāre*)・工匠 (*amoktse*)・織工 (*wawāntsa*) などにも提供されている。

タイプ 3 は、種・製粉や銭の納入・支出などに関するものである。この分類に属する文書は、損傷が最も激しいが、特徴として、その署名の在り方を指摘することができる。文書の右側には、仕事を担当した在家の者（ここでは、信徒か、専門に生業としている者かの判断はできない）の画指があり、左側には、*Swāmi Aśari* 及び *Yotkolau*（もしくは *Yotkolo*）と称される管理者の画指が確認される。筆者らの研究に拠れば、main group に属する文書の紙背には、この *Swāmi Aśari* の署名が見られるが、*Swāmi Aśari* は、梵語 *svāmin-* と *ācārya-* に由来し、前者は「(寺?) 主」を指していると思われる。在家の者の側では、通常、*Yirpsuki* (直訳は「監督者」と称される者が画指をしているが、場合によっては、*Yirmakka* (直訳は「出納係」と称される者(確認されている例では、全て女性)が、*Yirpsuki* の後に画指をしている。画指を行っている者の中には、ソグド人の名前も見られる。また、寺院のために仕事を行った者の中には、牧羊や牧牛に携わっていたと推定される人々も散見される。

これらの文書の年代について、Schmidt (2001) は 10・11 世紀（西ウイグル時代前半）と推定している。しかしながら、外形的特徴、即ち、紙の幅（中国式の紙の高さ）が 27.5~28.0cm で、唐代の中央アジア出土世俗文書とほぼ一致するだけでなく、画指などから、唐代のものと推定される。また、署名に関しては、二人の *Pañcwarike* が、それぞれ「金」「見」といった漢字を署名としている例さえ見られる。

内容の面から見た場合、官名や呼称などの点でも、西ウイグル王国時代に属すると考えられる特徴は見られない。特に注意すべきは、ここで使用されている貨幣である。これらの文書では、紙に書かれた、その他の場所から発

見されたトカラ語 B 世俗文書と同様に、*cāne* (< 錢) のみを使用し、区別はされていない。これに反して、トカラ語 B 木簡では、通常、*k_uśāne* (「クチャの錢」を指す) が使用されるが、時には、*k_uśāne* と並んで、*cāne* や *tinār* と称される金貨 (< Buddhist Skt. *ḍināra*- 'denarius') も使用される。そのため、貨幣に関して区別が見られない紙文書は、銅錢が安定的にクチャで使用されていた唐代の状況を反映していると見られ、これは、棉布や銀錠が主要貨幣として使用されていた西ウイグル王国時代とは大きく異なっている。

これらの文書には、僅かではあるが、トカラ語 B による紀年が残されており、それらは、*Kṣemārcune* 王の二年 (虎年) と再建することができ、この頃にかかれたものと推定することが可能である。この王の名前は、スバシの題記 (G-Su34) やロシア所蔵の寺院文書 (SI Toch./9, 13) にも見られ、これらの紀年から同一の王を指していることが確認できる。同じく *Kṣemārcune* 王の二年 (虎年) の紀年を持つ SI Toch./9, 13 には、「*yauyekṣi* < 游奕使」 「*kwām* < 關・館 (ここでは後者の可能性が高い)」 「*tep* < 牒・帖」といった唐朝による直接支配を反映する語が見られるばかりか、本稿で検討している main group には、*śwaiṣyānk* という術語が見られ、これは漢語の「税糧」に対応する。この「税糧」は、現在までに知られている漢文文書での例は極めて稀で、「唐年次未詳龜茲白向宜黎租桃園契」などの少数の中央アジア出土唐代文書に確認されるのみであり、トゥルフアン・敦煌出土の漢文文書には見られない。これらの漢語からの借用語は、唐が中央アジアより撤退した後、1 世紀或いは、それ以上の長い期間にわたって、トカラ語 B に残存したものとは考えにくい。

ここで注意されるべきは、森安孝夫 (2004d) によって説明されている金花王の例のように、*Kṣemārcune* という名前の王は、必ずしも一人であったとは限らない点である。筆者らは、トゥムシュク語資料としてベルリンに所蔵されている TS43 が、トカラ語 B 木簡であることに気づき、そこに、*Kṣemārcune* という王名を見出した。紀年の方法から、この王は、上に挙げた *Kṣemārcune* よりも、さらに古い時代の王であると考えている。

また、本論文で扱う文書群に画指が見られる点については既に言及したが、

一般に紙で書かれたトカラ語 B 世俗文書には画指が使用され、ウイグル語文書で見られるタムガ印は使用されない。ここで注目されるのは、トカラ語 B で見られる画指は、コータン語・トゥムシユク語などの文書に見られるものと比較して簡略である点である。即ち、トカラ語 B 世俗文書では、「某某の *kapci*」という記載の横に、ただ三つの墨跡のみを記して指形とし、指形を表す墨跡の間に文字が書かれることはなく、また年齢も記されない。

画指の習慣は、恐らく七世紀初めに高昌に伝えられたものと思われるが、この方法を導入した頃、高昌の人々はこのやり方に慣れなかったようで、呉震 (1995) と同様に、筆者らは、指形を表す記号の間に説明の語句を挿入したり、或いは指形を詳細に描いたりする例が数多く見られることは、高昌の人々が画指という方法を使用し始めた頃に現れた折衷形式であると考えている。七世紀後半以降、高昌の人々は徐々に画指の簡略化を行い、仁井田陸が言う「点式画指」を日常的に使用し始めた。このような簡単な形式は、トカラ語 B 世俗文書に見られるものと非常に似ている。高昌地域において、画指が辿ったこのような過程から、トカラ語 B 世俗文書に見られる画指の形式は、クチャの人々が画指という方法に慣れ親しんでいる時代のものであると考えられる。

Emmerick が指摘しているように、トカラ語 B の *kapci* は、トゥムシユク語に借用されている。一方、「画指」という語が、トゥルフアン文書に定型化された語として使用される最も早い例は 641 年、即ち唐王朝が高昌を征服した翌年である。発音が「画指」とほぼ同じ形式の「獲指」も、トゥルフアン文書には広く見られる。残念ながら筆者らは、現在のところ、トカラ語 B の *kapci* の導入経路と音韻変化に十分な解釈を与えることはできない。

7・8 世紀に漢文文書で流行していた「点式画指」の在り方には、恐らく 9 世紀初めに変化が生じたと見られる。この点について、東トルキスタン出土の文書資料は非常に少ないが、敦煌出土の文書には、9 世紀の 30 年代以降、「書指」「書紙」などの変異が現れることから、「画指」を含む定型句に変化が生じたことが窺える。また、この時期以降、敦煌文書には、「点式画指」は見ら

れず、より複雑な方法が出現する。このようなより複雑な形式は、仁井田陞が言うような「画指本来の形式」ではなく、説明の必要から、その他の部分を補った形式と見做すべきである。言い換えれば、この頃、画指の方法は既に一般的ではなかったため、説明を加えねばならなかったのであろう。このような現象は、高昌地域に画指が伝わった頃の現象と似ている。

以上に略述した中央アジアにおける画指の状況と変遷、ウイグル語文書には画指が見られない点を考慮すれば、トカラ語 B 世俗文書に見られる非常に簡略化された画指の形式は、唐代文化がクチャ地域に深く浸透していた時期を反映していると言える。

これまでに述べた文書群が与える情報から、キジル発見の main group は、従来言われてきたような 10・11 世紀（西ウイグル時代前半）のものではなく、8 世紀頃の数年にわたる期間に集中的に書かれたものであると判断することができる。このような結論は、玉井達士によって提示された ¹⁴C による年代判定結果と近いものである。

氏名：慶昭蓉

ローマ字表記：CHING Chaojung

肩書：Ph.D. (École Pratique des Hautes Études)

専攻：トカラ語文献学専攻

氏名：荻原裕敏

ローマ字表記：Hirotooshi OGIHARA

肩書：Ph.D. (École Pratique des Hautes Études)

専攻：トカラ語文献学専攻